

日英語比較による come と go に関する一考察

松倉 信幸

要旨

本稿では、節分の掛け声の「鬼は外、福は内」という象徴的な表現が「クル」と「イク」を含め、直示動詞 come/go の用法そのものを言い表した隠喩であると捉えて、その論証を試みた。詳しくは、go=「鬼(不幸)は外」、come=「福(幸福)は内」と定義づけられよう。come は何かに接近する「内的な意味作用」を持つ。その一方で、go は何かあるものから離れる「外的な意味作用」が含意される。理論的根拠として、Clark(1974) の「come/go の正常/異常の状態変化」仮説から、come は「正常な状態への変化」に、go は「異常な状態への変化」に用いられる。同様に、橋本(2010)は、「come は存在するようになる〈好ましい状態になる〉ことであり、go は消失してしまう〈好ましくない状態〉になること」を取り上げた。また、田中(1993)は「come はポジティブな方向に向かうが、go はネガティブな方向に向かう」ことを示した。さらに小西(1980)は「動詞+補語」について、「通常の状態からそうではない状態への変化を表す。主に好ましくない変化、急激な変化を含意する。さらに、自然の変化だけでなく、意図的な変化をも表す」と述べ例を示した。以上の例証を踏まえて「鬼(好ましくないもの)は外、福(好ましいもの)は内」の隠喩は妥当であると考えられよう。しかし、橋本(2010)の「現実世界」と「言語世界」における「良い状態変化と悪い状態変化」について、更なる考察が求められる。

キーワード

日英語比較、コロケーション、視点、ダイクシス、意味の拡張

1. はじめに

通常、英語の come と go の用法に関しては、発話時もしくは指示時における話し手もしくは聞き手の存在位置によって、様々なケースが想定されるため、実際に come と go が使用される際の個々のコンテキストに着目する必要がある。また、「動詞+補語」の構文における come と go について、『ジーニアス英和辞典第5版』（以下、ジーニアス英和）には、come [***go**] undone [true, alive, unstuck, close, good, loose]、もう一方で、go [***come**] bad [rusty, wild, mad, wrong]の表記が見られる。come の補語には、「望ましい意味」の形容詞が置かれ、もう一方の go の補語には、「望ましくない意味」の形容詞が用いられている。

日本語では、英語と同様に主語は用いられるものの、動詞に後置される補語の形態は、言語類型上、その構造はない。そのため、日英語の比較について、主として話者、主語、

および到達点等が問題になると考えられる。ここで、一つの「仮説」を提起したい。直示動詞 **come** と **go** の視点の捉え方とともに、これらの動詞に続く補語について、**come** の補語には肯定的意味（快・幸福）を表す語、**go** の場合には否定的意味（不快・不幸）を表す語が置かれる。その仮説とは、節分の掛け声として用いられている「鬼は外、福は内」という象徴的な表現である。**come** は何かに接近するため、「内的な意味作用」を持つ。その一方で、**go** は何かあるものから離れるため、「外的な意味作用」が含意される。この仮説は、直示動詞の **come/go** の用法そのものを言い表した隠喩と考えることができる。

本稿では、この仮説を、Clark(1974)の「**come/go** の正常/異常の状態変化」仮説および、**come/go** の直接スコープ(immediate scope: IS)の領域（内外への指向性）による解明を、認知言語学の視点から、これら文献に用いられた言語事実を用いて例証する。

2. **come** と **go** の基本的な意味と話し手の視点

2. 1. **come** と **go** の指向性の違い

come の基本的な意味は『ジーニアス英和』によると、「[物が移動する]〈人・動物・車などが〉(話し手の方へ) (やって) 来る ; (聞き手の方へ) 行く」とある。もう一方で、『ウィズダム英和第3版』によると、**go** の意味は「その場から遠ざかる」とある。下記の例(1)と(2)を見ると、(1b)「正午に来ます」は「到着時」を表し、もう一方で、(2b)の「正午に行きます」は「出発時」を表している。大江(1982:185)は、この **come** の「到達点」および **go** の「出発点」に、話し手の「視点が置かれる」と指摘した。上記、ジーニアス英和の **come** の意味の「来る」と「行く」については後述するため、ここでは扱わない。

下記(3)の言語事実により、**come** は話し手の方に「来る」、**go** は「そこへ行く」から、「その場から遠ざかる」の意味によって、**come** と **go** は話し手の視点が異なっていることがわかる。また、日英語の違いについて、小島(1984:155)によると、「英語では視点を、話し相手の方に置き、日本語では話し手の方にそれがある。」ここで、「英語では相手に対する敬意を表している」と指摘した。つまり、英語では聞き手に視点を置くことによって、相手（聞き手）に敬意を表しているのである。話し手がある出来事をどのように捉えるかについて、認知言語学では、「事態把握」の仕方をを用いる。池上(2009:65)は「発話に先立つ〈事態把握〉の営みには人間のさまざまな認知能力が関与しうる」と捉え、さらに、池上(2009:68)は「主体が自らの身体を介して直接体験的に事態とかかわり合うという意味で、客体/客観よりも主体/主観が焦点化される関わり方であるから、(中略) 主観的把握と呼ぶ」、もう一方で、「主体と客体とは隔離された場合に、主体の影響を受けることになるのは客体の方であり、客観的把握という」と述べている。ここにあげた「主観的把握」と「客観的把握」という対立する概念は Langacker (1990:20-21) に基づいている。

(1) a. Lisa comes to the restaurant at noon.

b. リサはそのレストランに正午に来ます。

(2) a. Lisa goes to the restaurant at noon.

b. リサはそのレストランに正午に行きます。

(3) a. Come here at noon.

b. 正午にここに来なさい。

(4) a. Go there at noon.

b. 正午にそこに行きなさい。

(5) a. May I come to your house tomorrow?

b. 明日あなたの家に行ってもよいですか。

小島 (1984:155)

2. 2. 日英語の話し手と聞き手の位置の違い

通常 come および go と、here および there のコロケーションは、上記の(3)と(4)の言語事実に見られる。この here と there の直示(ダイクシス)から、村田(2005:131)は英語の例文と日本語の例文を別々に表記したが、本稿では併記して、下記(6)から(9)に示す。村田は「話し手」および「聞き手」が「伝達時」および「到達点」のどの位置にいるのかという視点から分析を行った。(9a)の英文の非文(非文法文)について、村田(2005:133)は「伝達時に話し手は到達点にいることを示すのに」、村田(2005:132)の go の条件、即ち、「伝達時にも到達時にも到着点にいないという条件によって、伝達時に話し手が到達点にいないことになる」ため、非文である。日本語例文の(8b)は「来ます」ではなく「そこへ行きます」、および(9b)も「行きます」ではなく「ここへ来ます」なら容認される。また、小泉(2001:30)は「行く」と「来る」の基本的な意味として、「行く」は「話し手がある方向へ向かって移動する行為」および「話し手からあるものが離れる移動行為」と述べ、「来る」は「話し手に向かってあるものが近づく移動行為」と述べている。

(6) a. I will go there tomorrow.

b. 私は明日そこへ行きます。

(7) a. John will come here tomorrow.

b. ジョンは明日ここに来ます。

(8) a. I will come there tomorrow.

b. *私は明日そこへ来ます。

[「明日そちらへ参ります」と解するなら日本語として容認される。]

(9) a. *John will go here tomorrow.

b. *ジョンは明日ここへ行きます。

村田 (2005:131)

2. 3. come/go と「クル」と「イク」の話し手と聞き手の位置の違い

前述の『ジーニアス英和』によると、come は「[物が移動する]〈人・動物・車などが〉(話し手の方へ) (やっ) 来る ; (聞き手の方へ) 行く」とあり、come の意味は「来る」のみではなく、「行く」も用いられる。菊池(2004:31)は、come と日本語の意味の比較について、Fillmore(1997:90-91)を引用して、「come は発話時ないし指示時における話し手、あるいは聞き手方向への移動を示し、指示時における話し手や聞き手の属している場所への移動として解釈されることもある」と掲げた。この come の用法は上記の『ジーニアス英和』の場合とほぼ等しい。英和辞典では簡潔に定義されているが、やはり Fillmore の説明の方が詳しい。

また、菊池(2004:30)は下記(10b)について、「日本語では聞き手方向への移動を表す際にイクを用い、クルを用いると非文になる」と指摘した。また、下記(13b)では「移動は聞き手に向かっているため、日本語のクルでは表すことはできない」と指摘した。これらの点により、先に掲げた come の「到達点」および go の「出発点」という基本的意味に加えて、ここでは「話し手」および「聞き手」が「伝達時」および「到達点」の「どの位置にいるのか」といった「位置」について押さえた。下記(12)の例では、come は聞き手方向への移動を示している。

(10) a. I'll come there right away.

b. *今すぐにそっちにくるから(待っていて)。

c. 今すぐにそっちにいくから(待っていて)。

菊池 (2004:30)

(11) a. I'll come there at dawn.

b. *夕方そっちへくるよ。

c. 夕方そっちへいくよ。

(*ibid.*)

(12) a. I came over to your place last night, but you weren't home.

b. *僕はタベ君のうちにきたんだけど、留守だったよ。

c. 僕はタベ君のうちにいったんだけど、留守だったよ。

(*ibid.*)

(13) a. I'm coming.

b. *今来るよ。

c. 今行くよ。

2. 4. come/go および「テクル」と「テイク」の話し手と聞き手の位置の違い

日本語の「て来る」と「て行く」について、牧野(1980:169)は、下記の(14)から(16)の例をあげて、「日本語では話し手と太平洋側がどんな共感の距離にあるか、また、問題は物理的距離ではなく、心理的認識が選択を決める」と述べている。この「心理的認識」の観点から話し手が、「太平洋側」にいるのは、「来る」を用いた(16)の例である。また、下記(17a)

の例では文末寄りの「誕生パーティ」に、(18a)の例では、同様に「映画」に「心理的認識」の度合いが高いと言えよう。

(14) 太平洋側もこれから寒くなるでしょう。

(15) 太平洋側もこれから寒くなって行くでしょう。

(16) 太平洋側もこれから寒くなって来るでしょう。 牧野 (1980:169)

(17) a. Susan can't come to your birthday party.

b. She's going to see her mother. Swan (2005:110)

(18) a. We're going to the cinema tonight.

b. Would you like to come with us? (*ibid.*)

come の中核的な意味とされる「相手のいるところへ行く」という言語事実が日本の小説の中に見られ、この日本語「行く」の英語の翻訳について、下記に巻下(1997:53-58)の例を取り上げる。(21b)の例から、巻下(1997:55)によると、come は「(話し手が)、(相手がこれから行くはずの所へ) 移動する意味を持ちうる」、また、(21b)の例について、巻下は「you が単独で行く場合は go を用いることから見て、come の使用が話し手と相手が当該行為の共演者であることを含意するとの感じが強められる」と、go との意味の違いをよく捉えた言語事実を用いて分析を行っている。また、come の「移動」について、さらに日本語から英語の翻訳例(19b)を用いて、巻下は「話し手か相手が移動する(ゼロの場合もある)所へもう一方が移動することと、話し手と相手が確実に一緒になるという前提が come によって表現される」との分析は、「移動」の意味について、さらに踏み込んだ捉え方を提示している。

(19) a. 「私もいつか、あなたたちの世界にいきますよ」

遠藤周作『口笛を吹くとき』(En: *When I Whistle*)

b. "Sometime I'll be coming to your world, too." Gessel, Van C. 訳 1980

(20) a. 「じゃあ君、先に一人でどこかに行ってるよ、僕はいろんな用事を済ませてから行くから、・・・」 村上春樹『ノルウェーの森』(En: *Norwegian Wood*)

b. "Okay, then, you go on ahead and I'll come after you once I've cleared up things this end." Birnbaum, Alfred 訳 1989

(21) a. 「君たち、どうする。どこかで一杯、やっついていかないか」 遠藤周作(*ibid.*)

b. "What're you two doing now?"

"Will you come and have a drink with us?" Gessel (*ibid.*)

巻下 (1997:53-58)

3. come と go の意味の拡張

come は小西(1996:85)によると、その中核的意味は、「来る、行くから一步踏み込んで意識の中心に近づく」と捉えている。もう一方で、go は小西(1996:216)によると、「話し手中心の語で、話し手のいる場所からほかのところへ行く（発進・進行・到着・結果・状態）」と捉える。従って、これらの意味の「比喩的な拡張」によって、感情や思考の移動が行われる例として、下記の(22)から(24)の come および (24)から(26)の go の例が見られる。(22)から(24)では、come の主語には「成功」、「愛情」、「夢」の抽象名詞が用いられ、(25)から(27)の go の場合には、everything, it, anything といった主語が用いられている。

(22) a. Success often comes from hard work.

b. 成功はしばしば勤勉から生まれる。 小西 (1996:94)

(23) a. Love will come in time.

b. 時がたてば愛情が生まれてくる。 小西 (1996:95)

(24) a. My dream of going to America has come true.

b. アメリカへ行くという私の夢がかなった。 (ibid.)

(25) a. Everything is going well [wrong].

b. すべてがうまくいっている[いっていない]。 小西 (1996:96)

(26) a. How is it going?

b. どう調子は。 小西 (1996:226)

(27) a. Anything goes (here).

b. (ここでは) 何をしてもよい[何でもまかり通る]。 (ibid.)

3. 1. Clark (1974) の「come/go の正常/異常の状態変化」仮説

次の例(28)から(31)は、河上(1981:254)が Clark(1974:322-324)の“Normal States and Evaluative Viewpoints”から引用した come と go に up と down を共起させた例である。Clark によると、「平熱から上がれば go up、下がれば go down、下がって平熱になれば come down, 上がって平熱は come up を用いる。」さらに、「come は‘entry into the normal state (i.e. normal body temperature)’を、go は‘departure from the normal state’を表す」、下記 go の destination は ‘the non-normal state’ である。従って、come は「正常な状態への変化」に用いられ、go は「異常な状態への変化」に用いられる。

(28) Duncan’s temperature went up today.

(29) Duncan’s temperature came down today.

(30) Duncan’s temperature went down today.

(31) Duncan’s temperature came up today. Clark (1974:322-324)

同様に、荒木(1986:231)によると、上記と同じ Clark (1974:322-324) から下記(32)から(33)の‘come down’と‘go down’の引用例が見られ、「come を用いた場合は肯定的な評価を、go を用いた場合は中立的あるいは時には否定的意味の評価をもつことがある。」と指摘した。

(32) The plane came down near the lake.

(33) The plane went down near the lake.

Clark (1974:322-324)

同じ動詞句の意味の違いについて、荒木は「come を用いた場合は比較的軽い事故であったという意味であるが、go を用いた場合は壊滅的事故」の意味合いをもつと指摘した。また、この二つの文に「safely という副詞を加えると、(34)は文法的文であるが、(35)の場合には非文になる。」

(34) The plane came down safely near the lake.

(35) *The plane went down safely near the lake.

(*ibid.*)

さらに、橋本(2010:66)は、上野(2007:370-371)の例文(36)および(37)を取り上げて、「言語の世界では〈存在するようになる〉ことが、〈好ましい状態になる〉ことであり、〈消失してしまう〉ことが〈好ましくない状態〉と捉え、〈存在〉を表すのは come、〈消失〉を表すのは go」と上野は捉えていると述べた。橋本(*ibid.*)は下記(36)の上野の例について、「痛みがあった状態からそれがなくなった状態」に、同様に(37)は「疲れがあった状態からなくなった状態」と述べている。特に興味深い点は、橋本によると、「現実世界における良い状態変化と悪い状態変化と、言語世界における良い状態変化と悪い状態変化では指しているものが異なる」という点である。

(36) Take two tablets of this medicine after each meal until the pain [goes/*comes] away.

(37) My fatigue was [gone/*come] after lying down to rest for some time.

上野 (2007:370-371)

3. 2. 句動詞の意味の拡張

come と go の句動詞には、双方に同じ前置詞とのコロケーションがしばしばみられるため、両動詞はその句動詞の比較をするには最適と言えよう。勿論、その意味は異なるが、両者の比喩的な意味の違いに着目したい。

田中(1993:53)によると、「come と go の句動詞の意味に come と go の方向性が強く関与

して（中略）視点の違いが比喩的な用法の違いにも表れている」。また、‘come at’ と ‘go at’ について、田中(1993:53)は、「抽象的な意味においても基本的には同じ意味解釈が可能である。」両者は「それぞれある点のところに来る。また、ある点のところに行く。ということであるが、それぞれが〈到達する〉と〈襲う〉という意味を展開させていくのは自然である」と述べた。田中は「意味を展開させていく」と述べたが、本稿では「意味を拡張させていく」と捉えたい。

(38) a. come along (やってくる)

b. go along (進んでいく)

(39) a. come at (達する)

b. go at (襲いかかる)

(40) a. come off (取れる)

b. go off (立ち去る、爆発する)

(41) a. come over (やってくる)

b. go over (渡る、視察する)

(42) a. come up (のぼる、上京する)

b. go up (のぼる、上昇する)

田中 (1993:53)

3. 3. 動詞＋補語の意味の拡張

心理的な視点の移動について、田中(1993:52)によると、視点の置かれているところに、「向かって来る動きはポジティブな動きであり、離れる動きはネガティブな動きを暗示する傾向がある」と述べている。そこで、田中は下記の例をあげて、「come はポジティブな方向に向かうことを示し、go はネガティブな方向に向かうことを示す」としている。

(43) a. come true (本当になる)

b. go bad (腐る)

(44) a. come alive (生き生きしてくる)

b. go mad (狂う)

(45) a. come right (うまくいく)

b. go bankrupt (破産する)

田中 (1993:52)

come と go のダイクシスの関係から、荒木(1986:229)によると、Clark(1974:319)の下記(46)の非文の例は、話者と聞き手が家の中にいて、外に出る場合に、come を用いることは出来ない。同様に、下記(49)の非文の例も同じである。

(46) *I'm coming outside.

(47) I'm going outside.

(48) I'm coming in.

(49) *I'm going in.

Clark (1974:319)

また、荒木(1986:230)によると、「精神的・肉体的に通常の状態へ戻る場合は come を用いる。come to (意識を取り戻す)、come out of the coma (昏睡状態から覚める)、逆に、通常の状態から離れていく場合は go を用いる。go insane (狂う)、go into temper (かっとなる)」また、人間以外のものについても、下記の例の通りあてはまる。

(50) a. *The motor went alive [to life] again.

b. The motor came alive [to life] again.

(51) a. The motor went dead.

b. *The motor came dead.

(52) a. The sheep went astray in the blizzard.

b. *The sheep came astray in the blizzard.

荒木 (1986:230)

動詞 'go+C' (形容詞・過去分詞)の形態は、小西(1980:660)によると、「通常の状態からそうでない状態への変化を表す。主に好ましくない変化、急激な変化を含意する。さらに、自然の変化だけでなく、意図的な変化をも表すことができる。」また、この形態で、補語の位置には、通例では接頭辞 un-用いられる過去分詞がしばしば見られる。

(53) a. But something had gone wrong.

b. だが、具合の悪いことが起きていた。

小西 (1980:660)

(54) a. The telephone has gone dead.

b. 電話が通じなくなってしまった。

(*ibid.*)

(55) a. My teeth go funny on me.

b. 歯の具合がおかしい。

(*ibid.*)

(56) a. Her complaints went unnoticed.

b. 彼女の告訴はずっと無視されたままだった。

小西 (1980:661)

(57) a. 'To pit it otherwise, I don't want anything to go untried.'

b. 「つまりですね、どんなことでも試してみないと気がすまないのです。」

(*ibid.*)

4. おわりに

本稿第2章で come/go と「クル」と「イク」の話し手と聞き手の位置の違いについて、

実際に come と go が使用される際の個々のコンテクストに着目し、come と go は話し手の視点が異なっていることが認識された。また、come の「到達点」および go の「出発点」という基本的意味に加えて、日英語の「話し手」および「聞き手」が「伝達時」および「到達点」の「どの位置にいるのか」といった「位置」について考察を加えた。第3章では節分の掛け声として用いられている「鬼は外、福は内」という象徴的な表現が「クル」と「イク」を含め、直示動詞 come/go の用法そのものを言い表した隠喩であると捉えて、その論証を試みた。即ち、go=「鬼(不幸)は外」、come=「福(幸福)は内」と定義づけられよう。come は何かに接近するため、「内的な意味作用」を持つ。その一方で、go は何かあるものから離れるため、「外的な意味作用」が含意される。また、come here の表現から、ポジティブな幸福につながる事柄が「こちら側(内側)に来ること」が望まれる。もう一方、go there は、ネガティブで不幸につながる事柄が、「こちら側から離れて外側に行くこと」が望まれる。理論的根拠として、Clark (1974) の「come/go の正常/異常の状態変化」仮説を用いた。Clark によると、come は「正常な状態への変化」に用いられ、go は「異常な状態への変化」に用いられる。橋本(2010:66)は、上野(2007:370-371)の例について、「言語の世界では〈存在するようになる〉ことが、〈好ましい状態になる〉ことであり、〈消失してしまう〉ことが〈好ましくない状態〉と捉え、〈存在〉を表すのは come、〈消失〉を表すのは go」と上野は捉えていると述べた。また、「動詞+補語」の意味の拡張について、田中(1993:52)は「come はポジティブな方向に向かうことを示し、go はネガティブな方向に向かうことを示す」例を示した。さらに小西(1980:660)は「動詞+補語」について、「通常の状態からそうでない状態への変化を表す。主に好ましくない変化、急激な変化を含意する。さらに、自然の変化だけではなくて、意図的な変化をも表す」と述べ、例を示した。以上の例証を踏まえて、「鬼(好ましくないもの)は外、福(好ましいもの)は内」の隠喩は妥当であると考えられよう。しかし、橋本(2010:66)の「現実世界における良い状態変化と悪い状態変化と、言語世界における良い状態変化と悪い状態変化では指しているものが異なる」という指摘があるように、「現実世界」と「言語世界」とで異なる考察が求められる。

参考文献

- 荒木一雄編 (1986)『英語正誤辞典』研究社出版 231.
- Clark, E.V. (1974) "Normal States and Evaluative Viewpoints" *Language* 319-324.
- Fillmore, C.J. (1997) "Toward a theory of deixis" *University of Hawaii Working Papers in Linguistics* 3 90-91.
- 橋本美喜男 (2010)「Come と Go における基本用法と拡張用法に関する一考察」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』32号(1)57-70.
- 池上嘉彦 (2006)「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『月刊言語』35(5) 20-27.

- 池上嘉彦 (2009) 「認知言語学における〈事態把握〉—〈話す主体〉の復権」『月刊言語』
38(10) 62-70.
- 井上永幸・赤野一郎編 (2012) 『ウィズダム英和辞典第3版』三省堂.
- 河上道生 (1981) 「59.the water had come down (2)」安藤貞雄・福村虎治郎・河上道生・
小西友七・三浦新市・村田勇三郎・渡辺登士著『英語語法大事典第3集』大修館
書店 253-257.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店 181-185, 253-266.
- 菊池敦子 (2004) 「come とクルの意味拡張における到達点の違い」佐藤滋・堀江薫・中村
渉編『ひつじ研究叢書(言語編第34巻対照言語学の新展開)』ひつじ書房 30-31.
- 小泉保編 (2001) 『入門語用論研究—理論と応用—』研究社出版 30.
- 小島義郎 (1984) 『三省堂選書 110 英語辞書学入門』三省堂 154-155.
- 小西友七 (1996) 『英語のしくみがわかる基本動詞 24』研究社出版 85-98, 214-230.
- Langacker, R.W. (1990) "Subjectification," *Cognitive Linguistics Vol.1* 5-38.
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法』大修館書店 169.
- 卷下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 『日英語比較選書①文化と発想とレトリック』研究社出版 53-
58.
- 南出康世主幹 (2014) 『ジーニアス英和辞典第5版』大修館書店
- 森田良行 (1996) 『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房 211.
- 村田勇三郎 (2005) 『現代英語の語彙的・構文的事象』開拓社 130-139.
- 中澤恒子 (2002) 「『来る』と『行く』の到着するところ」生越直樹編『対照言語学』東京
大学出版会 291-304.
- 日英言語文化研究会編 (2005) 『日英語の比較—発想・背景・文化—』三修社 112-113.
- 大江三郎 (1982) 『講座学校英文法の基礎第四巻動詞(1)』研究社出版 184-185.
- 高野恵美子 (2011) 「日英移動動詞 COME と GO の対照研究: 認知言語学の視点から」『学
苑・英語コミュニケーション紀要』No.846 28-39.
- 田中茂範 (1993) 『英単語ネットワーク・基本動詞編』アルク 48-68.
- 上野義和編 (2007) 『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ』英宝
社 370-371.
- 国際地域学部国際地域学科 matsukura@m.suzuka-iu.ac.jp

A Comparative Study on *come* and *go* in the Japanese and English Languages from the Viewpoint of the Two Cultures and Communication

Nobuyuki MATSUKURA

Abstract

This paper is intended as an investigation of a comparative study on *come* and *go* in the Japanese and English languages from the viewpoint of the two cultures and communication.

To begin with, the construction of “*come* and *go*+complement” in the Japanese and English languages is analyzed. According to *Genius English-Japanese Dictionary (5th ed)*, the definition “*go* [**come*] bad [rusty, wild, mad, wrong], and *come* [**go*] undone [true, alive, unstuck, close, good, loose]” is shown, which means that the “*come* + complement” has a positive meaning; on the other hand, “*go* + complement” has a negative meaning. The positive and negative meanings in the two languages are argued in this paper.

Furthermore, taking into account the cultures and communication of both languages, the functions of *come* and *go* are analyzed on the hypothesis “Devils out, good luck in.”

Keywords: Comparative Study, Collocation, Semantic Extension, Deixis, Perspective